

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	和辻哲郎の日本精神考とその周辺 〈研究論文〉
Author(s)	王, 艶玲
Citation	HABITUS , 17 : 61 - 76
Issue Date	2013-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/39016
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039016
Right	
Relation	



和辻哲郎の日本精神考とその周辺

王 艶 玲

(長江師範学院副教授)

1. はじめに

和辻哲郎は、全集が刊行されるほどの夥しい著書を生前に残した。だから彼が日本精神についてどう考えていたのかは、いろいろな著書に当たれば自然に分かるかと思っただが、意外にそうでもない。それは驚きである。例えば和辻の名を一躍世に知らしめた『古寺巡礼』には「日本文化」や「精神」という言葉は度々見受けられるけれども、「日本精神」という言葉は1回も使用されていない。この中では「精神」という言葉は、「精神的」という形での形容詞や副詞の用法以外に、名詞としては「ギリシア的精神」「芸術的精神」「仏教の精神」「写実的精神」「悲劇的精神」といった形で用いられている。これに対して「日本文化」という言葉は、「日本文化の権利」「固有の日本文化」「現在の日本文化」といった具合に、わりと無造作に使われている。このように和辻は、「日本文化」という語については、若い時分からいろいろと繰り返し使用している。これに対して、「日本精神」という語は、やや事情が異なる。この語を「日本精神史」という語と比べてみると、使われ出したのは後者のほうが早い。たかだか「史」があるかないかの違いであるが、普通であれば、まず「日本精神」の定義が与えられ、その後に「日本精神史」という語が使われるはずである。ところが和辻の場合には逆である。「日本精神史」という語が先に使われ、その後「日本精神」という語が自覚された。どうしてそうなったのか。以下では、この点を明らかにしてみようと思う。

2. 日本文化論者としての原点

『古寺巡礼』（1919）と『日本古代文化』（1920）は、それぞれどういう意図で書かれたのであろうか。われわれは、『倫理学』や『日本倫理思想史』を著し、日本倫理学会に輝かしい業績を遺した和辻哲郎という人物を、どうしても倫理学の大家として眺めがちである。それは間違いではないし、むしろ正当な評価と言えよう。だがこうした視点から二書を眺めると、これらの間の連関や細かい差異がほとんど無視され、和辻の魅力も半減してしまう。物事を結果から眺めると、気付かずにそのような弊に陥りやすい。私は逆に、和辻を優れた日本文化論者として眺めることにしたい。そうなると、やはり『古寺巡礼』を原点に置かざるをえない。

『古寺巡礼』の評価について、いちいち講釈するまでもないであろう。この書が出版されてからほぼ1世紀になる今日でも、なお愛読者が居続けるという事実がすべてを物語っている。ただ、この書が学術書ではなく、趣味的な一般書として刊行されたという点は、注意しておいたほうがよい。これは若い和辻がひたすら自分の感性だけを頼りにして著した随筆、日記、ノートの類いで、半分は彼自身のために書かれている。「改版序」では、この書を「書きなおしたい」「はずかしく感ずる」「幼稚」「時勢おくれ」などと自評する一方で、ここには「若い情熱」や「自由な想像力の飛翔」があるので手を加えないことにする、とも述べている¹⁾。これを読むと、初版の頃の形態がずっと維持されているものと錯覚してしまう。しかし谷川徹三によると、初版本と改訂本とで微妙な差異があり、削除部分の多くは若い和辻が自分の感情を素直に表明した個所に集中しているという。²⁾また谷川は、本書が「学者として」³⁾ではない和辻によって書かれ、そして彼が「人間として」いかに「生来感覚の鋭敏な、感受性の豊かな、さらに感情量の大きな人」⁴⁾であったのかを、明らかにしている。この指摘は重要である。つまり、『古寺巡礼』というのは、和辻がまだ学者ではなかつ

た時期に書かれているのである。以下ではこの点に留意して考えてみる。

和辻は、『古寺巡礼』の翌年に『日本古代文化』を出版すると共に、東洋大学教授に就任している。因みに、湯浅泰雄は和辻の仕事を、『古寺巡礼』『日本古代文化』などを著した文学的活動の時期(第一期)、『日本精神史研究』『原始基督教の文化史的意義』『原始仏教の実践哲学』『風土』などを著した文化史家の時期(第二期)、『倫理学』『日本倫理思想史』などを著した和辻倫理学の確立期(第三期)、の三つに分類している。⁵⁾この分類に従えば、『日本古代文化』は第一期に属することになる。とりあえず、今はこの分類法を受け入れておこうが、実はこうした分類法にあまり関心がないので、もう少し違った観点から同書を取り上げることにしたい。

そこで、まず注目したいのは『日本古代文化』の「初版序」である。これには「仏教文化の影響を受けない時代の、日本文化の真相を明らかにしたい」⁶⁾とある。これはどうしたことか。この前年に書かれた『古寺巡礼』は日本における「仏教文化」を限りなく賛美したもので、一般読者に古寺巡礼ブームを巻き起こした名作である。もし和辻がこの前年の成功運に、新著『日本古代文化』でもあやかりたいと願ったのであれば、同一の観点からか、あるいはその延長線上で「日本文化」を取り上げるのが自然だし、得策のような気がする。ところが、本書では「仏教文化」が移植される以前にまで遡ることが意図されている。和辻は次のように言っている。「日本古代、とくに日本古代文化は、四年以前の自分にとっては、ほとんど「無」であった。…が、一人の人間の死が偶然に自分の心に呼び起こした仏教への驚異、及び続いて起こった飛鳥、奈良朝仏教美術への驚嘆が、はからずも自分を日本の過去へ連れて行った。そうしてこの種の偉大なる価値を想像した日本人は、そもそも何であるかという疑問を、烈しく自分の心に植えつけた。…この書もまたこの疑問から生まれたものにほかならない」⁷⁾と。

これを見ると、和辻の日本古代文化への関心は、「無」－「偶然」－「必然」という段階を辿っていることが分かる。つまり、仏教文化への関心が偶然に訪れ、それを機に日本古代文化への自覚が芽生えたことになる。このように考えれば、何故に『古寺巡礼』には「仏教の精神」という語はあっても、「日本精神」という語がないのかが納得できる。逆に言えば、『古寺巡礼』では、仏教精神が日本文化に固有でないことを自覚したうえで、その源流に遡るために、中国、インドへと広く目を向けていることが分かる。これは『風土』の視点とも重なり、国際人と和辻哲郎の面目躍如である。だがよく考えると、和辻は仏教文化から、記紀や万葉などを拠り所とする日本の源流文化に転向したわけではないことが分かる。すなわち、ここで「仏教文化の影響を受けない時代の、日本文化の真相を明らかにしたい」と述べる一方で、「この種の偉大なる価値を想像した日本人は、そもそも何であるか」とも述べている。つまり、彼は「日本古代文化」という古い服の上に「仏教文化」という新しい服をみごとに重ね着した古代日本人の流麗さに心を惹かれたのである。そう考えれば、彼が仏教文化を保持したままで、古代日本人の「生」を明らかにしようとしていたことが分かる。この方向性は、『続日本精神史研究』でも維持され、「日本文化の重層性」⁸⁾といった形で発展させられている。

3. 『日本古代文化』の改稿版の意図

『日本古代文化』の初版は1920年に、その改稿版は1939年に出ている。先にも述べたように、初版の意図は古代日本人の再発見であったが、この初版の意図は改稿版になると大きく変化している。初版から改稿版までに約二十年の歳月が流れ、その間に日中戦争が勃発して泥沼化し、日本全体が軍国主義一色になっている。このような時期に『日本古代文化』の改稿版が出たこと自体が驚異であるが、この点からだけでも、出版の意図が初版時のような純粋なもので

なくなっていることは容易に想像がつく。確かに「偉大な芸術を創造した日本人は一体何物であったか」⁹⁾というように、初版と同様の問題提起が「改稿版序」でも見られる。だがその目指すものは、もはや単なる「日本人」ではなく、日本民族全体に潜在する日本思想の古層の発掘である。この時期には、和辻はもはや一文人として自由に振舞うことができなかつた。彼は、東京帝国大学教授であると共に、国家思想の高揚や監督指導の任に当たった文部省教学局参与でもあった。そのことを鑑みれば、本書の意図が既に別のところに移っているように見えるほうがより自然である。和辻は次のように述べている。「津田左右吉氏の『文学に現はれたる我が国民思想の研究、貴族文学の時代』からいろいろな意味で刺激を受け、…自分の疑問が津田氏の考察とちょうど逆の方向に向かっていたため、疑問はますます強められる結果となった。そういう刺激のもとに自分は初めて腰を落ちつけて本居宣長の『古事記伝』を通読し、古事記の美しさに打たれるとともにわが国の真の学者の偉大さに目ざめたのである」¹⁰⁾、また「大正八年には津田左右吉氏の『古事記及び日本書紀の新研究』が出た。この詳細な本文批評は自分にとって非常にありがたいものであった。古事記や日本書紀の史料としての価値があのように薄められるということは、自分にとってはかえって強く記紀の大きな価値を見いださしめる機縁となった」¹¹⁾と。

ここでは津田左右吉の思想的立場に立ち入っている余裕はないが、津田は和辻とは正反対に位置した。この時期の和辻は、左翼と右翼の両方から批判されて苦慮しているが、津田との対立はそのような低次元のものではない。天皇を「人」として解釈したのは、新井白石が最初だと伝えられるが、津田はその系譜に属する実証的な歴史家である。これに対して、和辻は自身の倫理学を創始したものの、本居宣長には及ばない。ここで彼は宣長を「わが国の真の学者の偉大さ」として絶賛しているが、それは偽らざる和辻の本音であろう。凡人のわれわれからすれば、この和辻の態度こそ虚心坦懐なものとして称賛したくな

るが、そのことは本稿と何の関係もないから、これ以上問題にしない。

さて、繰り返しになるが、『日本古代文化』の初版の意図は、日本古代文化の探求にではなく、仏教文化を受容した古代日本人の「生」の探求にある。これに対して、改稿版の意図は、津田とは反対の方向で記紀の価値を高めることである。こうすることは、要するに、記紀神話を歴史的事実として認め、万世一系の天皇による国家支配を正当化する皇国史観を擁護することにもなる。まさに時代状況がそのように和辻を駆り立てたと言うべきであろう。いずれにせよ、初版の意図が改稿版に至って大きく変更したことは確かである。この点について、ここではさらに論を深めることはしない。それよりも重要なことは、『古寺巡礼』から『日本古代文化』への1年未満の期間のうちに、和辻の日本文化観に何らかの変化が生じたかどうかの確認である。

これについては、何の変化もなかったというのが答えである。そうであれば、『古寺巡礼』と『日本古代文化』を一括りにして考える湯浅の分類法は、基本的には支持されてしかるべきである。しかし、この時期を「文学的活動の時期」と命名して、この後の時期と区別するのはどうだろうか。この点に関しては、私はもう少し違った見方をしている。結果面ではなく本質面から言えば、「倫理学者」であることは、和辻にとって仮面としての「ペルソナ」ではなかったか。いみじくも谷川徹三が「和辻さんの学問を豊饒にしたものが、ほかならぬ、その学者として和辻さんが拒んだものであったことを信ぜざるを得ない」¹²⁾と指摘しているように、そうした和辻の本質面から言えば、日本文化論者としての流れは、第一期以降も途切れることなく継続していると思う。

4. 丸山真男の批評

丸山真男は、『日本の思想』の「まえがき」で「日本思想史の包括的な研究がなぜ貧弱なのか」¹³⁾を論じることで、自著の独創性やその意義を強調してい

る。彼は次のように言う。「日本では、たとえば儒教史とか仏教史だとかいう研究の伝統はあるが、時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿るような研究は甚だまずしく、少なくとも伝統化してはいない¹⁴⁾と。そして「時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿るような研究」の観点からみて、限定的ではあるが、ある程度成功している書物として津田左右吉の『文学に現はれたる我が国民思想の研究』(1916-21年)を挙げ、そのうえで和辻にも言及している。「和辻哲郎の『日本精神史研究』もそれ自体としては貴重な業績であるが、やはり個別研究であり、通史として結実したときには倫理思想史という狛をとっている。日本精神史という範疇は、やがて日本《精神史》から《日本精神》史へと変容し、おそろしく独断的で狂信的な方向を辿ったことは周知のとおりである¹⁵⁾と。

丸山がここで挙げている『日本精神史研究』(1926)は、『古寺巡礼』や『日本古代文化』と同じように、古代中世の日本文化を中心に、その歴史、政治、宗教、思想、文学、芸術などを幅広く扱ったもので、文化哲学者としての和辻の本領がいかに発揮されている。しかしその内容から言えば、標題とは直接には関係なく、既出掲載論文を寄せ集めただけの書物である。だから丸山がここで「個別研究」と指摘するのも正しい。丸山の言う「時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿るような研究」は、この書物から読み取ることができない。

さて、上の点とは別に、丸山の引用文にはもう一つ気になる点がある。それは後半部分である。彼は「日本精神史」という言葉の一部を《》括弧付けにして、一つは「日本《精神史》」とし、もう一つは「《日本精神》史」として、二つに分けている。では、このように《》括弧の位置を替えることで、両者は意味の上でどのような違いが生じるのだろうか。この点について、丸山はもはや明確に述べていないけれども、後者が問題になるのではないかと思う。すなわ

ち、「日本」と「精神」という二つの単語からなる「日本精神」という複合語ではなく、「日本精神」という分解不可能な一つの単語が問題となるのではないだろうか。そう考えれば、この後の「おそろしく独断的で狂信的な方向を辿った」という個所も理解できる。そのうえで言えば、ここでの否定的な評価はだれに向けられたものであろうか。文脈からすれば、この個所は、和辻の『日本精神史研究』に言及した直後に挿入されているので、和辻に向けられているようにも見える。もしそうであれば、『日本精神史研究』の内容もそういったものでなければならないだろう。しかし丸山はこの著書に対して「個別研究」と断じたのであるから、和辻を念頭に置いているとは考えられない。だとすれば他にだれがいるのだろうか。

5. 「日本精神史」の和辻理解

『日本精神史研究』という標題とその内容が一致しないことに関しては、丸山の指摘を俟つまでもなく、和辻自身も認めて、「あの書〔『日本精神史研究』〕は「日本の精神史」に関する部分的研究を集めたものであって、「日本精神」の歴史的研究ではなかったのである」¹⁶⁾と述べている。すなわち、和辻が「日本精神史」という言葉を使ったのは、たいしてその意味も考えずに軽い気持ちからである。そう見れば、標題と内容の不一致問題にさほどこだわる必要はないのかもしれない。しかし、後の「日本精神」の流行を考えると、やはり和辻が不注意であったことは否めない。そうなると、何故に和辻は不注意だったのか、そこにどのような事情があったのか、が疑問点として生じる。そこで、この疑問に答えるために、『日本精神史研究』が書かれた意図を確認しておく。

『日本精神史研究』は、『日本古代文化』から6年後の大正期最晩年の1926年に書かれた。この前年には、和辻は、西田幾多郎の招聘を受けて、東洋大学教授から京都帝国大学助教授に転任している。和辻は「序言」で『日本精神史研

究』の出版経緯を説明している。それによると、「日本倫理史」と「日本思想史」の講義草案が本書の基になっているようだ。和辻は、最初、これらの原稿を取り込んだ「日本精神史」の出版を目論んだらしいが、研究を進めるうちに考えが変わっていったという。その事情について、和辻は次のように説明している。かなり長くなるが、重要なのでそのまま引用しておく。「考察をすすめるに従って仏教思想がいかにか根強くこれらの時代〔飛鳥寧楽時代乃至鎌倉時代〕の日本人の精神生活の根底となっているかを見だし、仏教思想の大体の理解なくしては考察を進め得ざるに至った。そこで自分はシナ仏教の理解によって、それがいかにか日本人に受容され、いかなる意味で鎌倉時代の新運動となったかを理解せんと志したのであったが、シナ仏教の理解はインド仏教の理解なくしては不可能であり、結局原始仏教以来の史的開展を理解することによってのみシナ日本における仏教思想の特殊性が理解せられ得るものであることを悟るに至った」¹⁷⁾と。このように、和辻の元々の関心は「鎌倉時代の新運動」にあり、この問題を究めるために、日本仏教、シナ仏教、インド仏教、原始仏教へと仏教思想の源流に遡っていった。和辻が京都大学に奉職した当時、西田幾多郎や鈴木大拙らを中心に禅文化の復興運動があり、それに和辻も私淑している。『日本精神史研究』の中の「沙門道元」(1920-1923)という論文を見ても、和辻がいかにか道元を中心とする禅文化に造詣が深かったかが垣間見える。それにしても、鎌倉新仏教を理解するためには原始仏教にまで遡らなければならないとする、その徹底ぶりには改めて驚かされる。この一点をとっても、和辻が並はずれた学者であることが分かる。が、そこまで仏教思想に拘り続けたわけだから、この時期、和辻が「日本精神史」をどう見ていたのかが、逆の意味で気になる。この点について、和辻は「学問としては日本精神史を明らかにするのも仏教思想を明らかにするのもその間の軽重の差があるとは思えない」¹⁸⁾と述べている。

ここから、本稿の「はじめに」で指摘した問題、すなわち「日本精神史」と

いう語が先に使われ、その後「日本精神」という語が自覚されたのは何故か、という問題の答えが明らかになる。すなわち、1926年頃までは、和辻にとって「日本精神史」という語は、特別な意味を持たず、「仏教思想」と同じ意味だったのである。言い換えるなら、和辻は、『古寺巡礼』以後この時期に至るまで、日本文化や日本思想、あるいは日本精神の基底に仏教思想のみを置いていた、ということである。

6. 「日本精神」への転向事情

『続日本精神史研究』は、その標題からして、前作の『日本精神史研究』と深い繋がりがあるように見えるが、そうではない。「日本精神史」と銘打っていても、前作と同様に「個別研究」の寄せ集めである。しかしよく見てみると、丸山の言う「時代の知性的構造や世界観の発展あるいは史的関連を辿るような研究」と関連する論文も幾つか見られる。最初に、同書の目次内容と脱稿年を確認しておく。

- ①「日本精神」(1934)
- ②「日本における仏教思想の移植」(1923)
- ③「日本文芸と仏教思想」(1933)
- ④「東洋美術の「様式」」(1925)
- ⑤「現代日本と町人根性」(1931,1935)
- ⑥「日本語と哲学の問題」(1929)

この中で「日本精神(史)」に関係するのは、①と⑤である。②～⑤は、標題と脱稿年からみて、出版物の体裁のために挿入されたと考えられる。さらに、この中の②～④は、1932年の博士論文『原始仏教の実践哲学』と何らかの形で関係していると思われる。①と⑤の二論文は「脱稿」の時期が近接するし、分量も他と比べて非常に多い。このことから、本書はこれらの二論文を中心に見て差支えない。特に、「日本精神(史)」との関連で言えば、①はその概念論として、⑤はその後退史論として特徴づけられる。⑤の内容は、功利主義を「町人道德」に見立てて批判しつつ、日本人固有の道德感から、それが

いかに遠いかを論じたものである。ここでは「日本精神」を積極的に論じるという形になっていないが、その裏の意味を読み取れば、「日本精神」が消極的に讃えられていると見ることもできる。さらに、穿った見方をすれば、日本近世文化や英米系思想を嫌って日本古代文化やドイツ思想を敬愛した、和辻には珍しい偏見の書と見ることもできる。

ここでは①の「日本精神」という標題の論文 [=日本精神考] のみを取り上げる。最初に脱稿年を確認しておく、この論文は1934年(昭和9年)の8月に書かれた。同年には『人間の学としての倫理学』、翌年にはこの論文も収めた『続日本精神史研究』と『風土』が出版されている。因みに、『日本精神史研究』が出版されたのは1926年なので、この論文はその8年後に書かれたことになる。それでは、1926年から1934年までのこの期間は、どのような時代であったのだろうか。

まず、和辻の個人史から確認すると、この時期の和辻は、ドイツ留学、父瑞太郎の死、京都帝国大学教授昇任、博士号取得、東京帝国大学倫理学担当教授就任と、公的に充実した時期であった。次に、政治的、社会的にはどうか。少し戻って1926年以前から見ていくと、『古寺巡礼』の前年の1919年には第一次世界大戦が終了し、翌年にはベルサイユ講和条約会議が開催された。日本は戦勝国としていろいろな便益を獲て、戦争景気が訪れ、一時的に繁栄を極めた。しかし1923年(大正12年)に予想もしなかった関東大地震に見舞われた。和辻が34歳の時である。これを境に日本社会は大きな転換点を迎える。社会矛盾が拡大し、左翼運動が激化した。『日本精神史研究』の前年の1925年には普通選挙法と治安維持法が成立し、和辻もマルクス経済学者河上肇との不幸な論争に巻き込まれた。¹⁹⁾『日本精神史研究』の翌年の1929年には世界大恐慌が起こり、日本も深刻な打撃を受けた。そして1931年に満州事変、1932年に五一五事件、『続日本精神史研究』が出た1935年に二二六事件、1937年に日中戦争が起きた。

この流れからすると、和辻が『続日本精神史研究』を著したのは『日本精神史研究』との繋がりからではないと思う。確かに「続」とあるので、前作を受けて『続日本精神史研究』を著したように見える。しかし両者の共通点は、既出掲載論文の寄せ集めという点だけであって、形式的にも内容的にも両者に繋がりはない。しかもこの間に十年ぐらいの歳月が流れている。もちろん、世の中には前作の出版後に、長い休業期間を経て続編を出版する作家もいるので、空白期間の長さは問題にならないかもしれない。その場合には、構想がしっかりと練られていると考えられる。和辻の場合もその可能性がないとは言えないが、俄かには信じ難い。それよりも、この数年前から「日本精神」という言葉が流行して日本人の心を捕え始め、軍国主義に協賛するようになったのではないか。それは和辻とて例外ではなく、日本精神考の執筆は、そのような時代思潮に影響されたものではないだろうか。

そのことは、和辻自身の著作から裏付けられる。例えば1935年刊の『続日本精神史研究』の「序言」には「今は「日本精神」の声を聞くことしきりである」²⁰⁾とか、本文冒頭にも「「日本精神」という言葉は目下流行語の一つである」²¹⁾とかある。先ほども確認したように、日本精神考が書かれたのは1934年であるが、この前後には五一五事件と二二六事件が起きている。この二つの事件により、日本の軍国主義が加速化されたというのは日本史の定説である。この時期に「国難」という言葉が頻繁に使われ、それと共に「日本精神」が盛んに吹聴された。井上哲次郎によれば、「明治以来、日本精神といふ言葉が使用されて、近来益々それが流行となって来た」²²⁾とされる。つまり、「日本精神」という言葉は明治以降になってから使われ始めたのであって、日本人が昔から自家薬籠のように使用してきた言葉ではないのである。もちろん、過去の文献を詳細に探せば「日本精神」という言葉に遭遇するかもしれない。しかし、いわゆる「日本」を統一国家として意識したのは明治以降であって、それ以前は「や

まと」という言葉のほうが普通であった。ただし、この「やまと」がそのまま日本国を表すかどうかは検討の余地がある。

いつ頃からか、「日本精神」という語が流行し、和辻もその渦中に巻き込まれたに違いない。この語は、『日本精神史研究』の初版の頃には、一般国民の間で問題になっていないが、日本精神考の頃にはそうではない。おそらく真相はこうであろう。和辻は「日本精神」という語をブームになる前から使っていたが、その意味には無頓着であった。丸山が言うように、和辻も「日本精神史」を「日本《精神史》」と受け取っていた可能性がある。だから、ことさら「日本精神」の定義を与える必要もなかった。ところが、その後「日本精神」が流行して「《日本精神》史」を受け入れざるをえなくなり、結果的に日本精神考を書く羽目になったのではないだろうか。事実、和辻は次のように述べている。「自分に対してこの問題が割り当てられたのは、たぶん自分が『日本精神史研究』の著者だからだろう」²³⁾と。すなわち、この論文は、和辻がみずから望んで書いたというよりも、仕方なしに書かされたものなのである。

7. おわりにー日本精神とは何か？

最後に、当時の日本精神論を少し紹介しておく。例えば安岡正篤『日本精神の研究』(1924,増補改訂版1937)、大川周明『日本精神研究』(1930)、紀平正美『日本精神』(1930)、清原貞雄『日本精神史概説』(1933)、安岡正篤『日本精神の根本』(1933)、井上哲次郎『日本精神の本質』(1934)、河野省三『日本精神の研究』(1934)、加藤仁平『日本精神の発展と教育』(1934)などがある。これらはほんの一部である。この頃「日本精神」や「日本精神史」などと銘打った著書がやたらと出回っている。また「日本精神」の定義についても、例えば「日本固有の精神である、日本民族に本来備はつて居る一種特有なる精神」²⁴⁾、「手を携へて祖国を守り、祖国を盛にする道」²⁵⁾、「何にくそ」といふ気持」²⁶⁾、「天

照大御神を中心とした神々に関する伝へ説^{こと}…即ち日本神話²⁷⁾、「日本民族及び日本国家が固有する純粹なる創造の根源」²⁸⁾などとあり、極めて不統一で、「日本精神」という語だけが独り歩きしている感がある。

では、和辻は「日本精神」をどのように捉えたのだろうか。彼は、まず、「日本精神」を「日本民族の全体の国民的自覚」として明確に定義する。そして、「日本精神」は中立的なもので、直接的ではなく「通路」を経て「発露」という。「日本精神」が時代の要請で「鼓吹」されると、右翼的、反動的、保守的といった誹りを受けるが、それは「国民的自覚の把握の仕方」に問題があるとされる。また、「日本精神」は普遍的なものが「発露」したものであるが、爆弾三勇士の例は「国家への犠牲」に欠けるので、その対象ではないとされる。「日本精神」への「通路」となるものが日本文化で、その主体は国民や日本民族である。すなわち、個人レベルでは「主体的なる肉体」であり、民族レベルでは「主体的なる風土自然」や「全体性としての主体的民族」である。

以上が、和辻の日本精神考の骨子である。彼の場合、過去の伝統が現在や未来に生かされるところに「日本精神」の「発露」を見いだす。これに対して、津田は、過去へと遡る根源主義の日本精神論を否定する。そして彼は、身近な生活の中に現れる現代精神にこそ目を向けるべきだと主張する。²⁹⁾まさに和辻と逆方向の考えを表明していて興味深い。この点についての論究は別の機会に期したい。

以上で、当初の目的はほぼ果たし終えたと思う。私は、本稿で、何故に「人間として」立派な人や学問的な天才でも、時代の潮流には逆らえず、自分の本音とは逆方向に流されてしまうのかを、和辻の例を通じて明らかにしたかった。和辻は「日本精神」について「簡単明瞭な答えを出せない」とか「よくわかっていない」とか述べており、この語の使用をむしろ避けていたように思われる。しかし「学者として」は、どんなことがあっても答える義務があると感じてい

たようだ。もし彼が「人間として」振舞っていたのであれば、もう少し違っていたかもしれない。和辻哲郎という人は、葛藤に苦慮しつつも、いつもこのような仕方に対処したのだろうか。こういう場合には、いい加減に誤魔化すやり方もある。しかし彼にはそれができなかった。そこが和辻の魅力だと言え言えないこともない。だが結局のところは、「人間として」どう振舞うかがその人の価値を最終的に決定するのだと思う。

註

- 1) 和辻哲郎『古寺巡礼』岩波文庫 1979年 5-7頁参照。
- 2) 同書「解説」273-278頁参照。
- 3) 同書 281頁参照。
- 4) 同書 278頁。
- 5) 湯浅泰雄『和辻哲郎』ちくま学術文庫 1995年 39-40頁
- 6) 『和辻哲郎全集』(3巻)1977年 11頁。
- 7) 同上。
- 8) 『和辻哲郎全集』(4巻)「日本精神」314-320頁参照。
- 9) 『和辻哲郎全集』(3巻) 6頁。
- 10) 同上。
- 11) 『和辻哲郎全集』(3巻) 7頁。
- 12) 『古寺巡礼』「解説」278頁。
- 13) 丸山真男『日本の思想』岩波新書 1961年 2頁。
- 14) 同書 2-3頁。
- 15) 同書 3頁。
- 16) 『和辻哲郎全集』(3巻) 281頁。
- 17) 『和辻哲郎全集』(4巻) 5頁。
- 18) 同書 6頁。
- 19) 湯浅泰雄『和辻哲郎－近代日本哲学の運命－』ちくま学芸文庫 1995年 164-171頁参照。
- 20) 和辻哲郎『和辻哲郎全集』(4巻) 岩波書店 1962年 275頁。
- 21) 同書 281頁。
- 22) 井上哲次郎『日本精神の本質』大倉廣文堂 1934年 1頁。

和辻哲郎の日本精神考とその周辺

- 23) 和辻哲郎『和辻哲郎全集』（4巻）281頁。
- 24) 井上哲次郎『日本精神の本質』大倉廣文堂 1934年 1-2頁。
- 25) 清原貞雄『日本精神概説』東洋図書株式会社 1933年 9頁。
- 26) 紀平正美『日本精神』岩波書店 1930年 2頁。
- 27) 河野省三『日本精神の研究』大岡山書店 1934年 2頁
- 28) 加藤仁平『日本の精神の発展と教育』同文書院 1934年 1頁。
- 29) 『津田左右吉歴史論集』岩波文庫 2006年 169頁参照。